

## 工場と戦場における女性

——第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕——

杉村使乃

### はじめに

現在、敬和学園大学では「表象に見る第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」という課題で共同研究が行われている。伝統的に戦争は「男性の仕事」として位置づけられてきたが、現実には多くの女性たちが戦争に関わってきた。そして今や戦闘員としての「女性兵士」を戦場に送っている国もある。この共同研究では、女性が大量に戦争に参加するきっかけとなった総力戦としての第二次世界大戦に時期を限定し、女性の表象は当時のジェンダー観とどのような関係にあるか、そしてその後のジェンダーの形成にどのような影響を与えたかについて国際比較を行う。方法としては、主要参戦国（日本・中国・アメリカ・フランス・ドイツ・イギリス）における女性の戦争協力のあり方を、新聞・雑誌・ポスターなど大衆向けメディアにおける女性表象の分析等によって明らかにする。そして、戦勝国と敗戦国、社会・政治体制の違い等に留意しつつ、国際比較によって検討・考察する。

ここでは第二次世界大戦下のイギリスの場合を考える。イギリスに関する限り、女性＝平和主義という単純な公式は当てはまらない。帝国主義の元、常に戦争を行ってきたこの国では、国家に貢献できるよう国民を適切にジェンダー化することは重要な戦略の一つであった。18～19世紀の女性たちには政治と財産において、法的な人格はなかった。ジャン・ジャック・ルソーの『エミール』（1762）は1770年代に5種類の英語訳が出るほど人気のあった著作であるが、そこで提示されている女性観と男女の役割分担は、この頃のジェンダーの形成に大きな役割を果たした。公的・私的領域はそれぞれ男性・女性に区分され、女性は何よりも「母」としての存在であった。子供を母乳で育て、避妊をしないことが推奨される。祖国のために戦った英雄を崇拜し、「愛国的」な徳を子供に伝えることも母親の重要な役割として挙げられている。ナポレオン戦争（1796-1815）の頃にはより多くの男性を戦場へ送り出すために、「生めよ増やせよ」という社会的要請もあり、イギリスの繁栄のためには何よりも母親であることを重んじる伝統的な女性観が広く受

け入れられていた<sup>(1)</sup>。

19世紀末、広大な帝国の中で各種紛争が勃発すると、兵士を産み、育てる「母」の役割の重要性は中上流階級だけでなく、兵士を再生産する上で重要な労働者階級にまで拡大した<sup>(2)</sup>。一方で、1860年以降は女性の法的、社会的地位の向上を目指して運動が繰り広げられる。結婚後の女性の法的立場の弱さ、工場における女性労働者の存在は無視できない問題となっていた。第一次世界大戦では、すでに多くの女性たちが銃後活動への参加を求められ、戦場に送られた熟練工場労働者に代わって女性たちが軍需工場を支えた。そして制服を身に付け軍隊を援護する女性たちが現れた。J.B.Priestleyは第二次世界大戦について、「イギリスほど戦時において徹底的に女性を登用した国はない。そして多くの女性が自ら進んで国家奉仕 (National Service) へ身を捧げた」と述べている (Anderson, 1)。第二次世界大戦時に多くの女性の労働力を稼動 (mobilisation) できたのは、第一次世界大戦の経験があったからである。

「戦争」という歴史を語る上で、「女性」という視点を用いた研究はかなり積み重ねられつつある。対戦中の女性表象に関しては、まず儉約や節約にいそしみ「家庭」を守る「母」としての役割のように従来与えられていた「女性領域」に分類されるものがある<sup>(3)</sup>。一方、第一次世界大戦以降は、「男性領域」であった機械工業、そして軍隊でも女性の労働力が大いに必要とされた<sup>(4)</sup>。ここでは主に女性工場労働者、そして制服を身につけ軍隊の援護活動を行った女性たちの役割を整理し、二つの大戦の間にジェンダー観がどのように変化していったのかについて報告を行う。

## 1. 第一次世界大戦と女性

本国を遠く離れた帝国の一部で行われていた争いと異なり、"The Great War"と呼ばれる第一次世界大戦で、イギリス国民は戦争というものを身近に体験することになる。「国家」における女性の役割を考える上でこの時期に注目すべきは女性による参政権獲得までの動きである。特にSylvia Pankhurst率いる「サフラジェット」(Suffragette)たちの激しい闘争は "Militant Feminism"と呼ばれ、「サフラジェット」はこの時代のメディアに多く取り上げられた<sup>(5)</sup>。女性参政権獲得運動と大戦における女性の役割の変化については大きな関連があると思われるが、ここでは第二次世界大戦との比較のため、女性の工場労働者と軍隊の援護組織を取り上げる<sup>(6)</sup>。

## 第一次世界大戦と女性に関する動き

- 1865年 J.S.Millが「婦人参政権」を公約に当選
- 1866年 「全国婦人参政権協会」(National Societies of Women's Suffrage, NUWSSの前身) 設立
- 1897年 「婦人参政権教会全国同盟」(National Union of Women's Suffrage Societies) Millicent Garrett Fawcettが会長に就任
- 1903年 「女性社会政治同盟」(Women's Social and Political Union WSPU) Sylvia Pankhurstが会長に就任
- 1904年 「国際婦人参政権同盟」(International Woman Suffrage Alliance) がベルリンに設立
- 1906年 Mary McCarthur 「全国女性労働者連合」(National Federation of Women Workers NFWU) 設立
- 1909年 First Aid Nursing Yeomanry (FANY) 結成
- 1910年 WSPUのデモ激化
- 1911年 出産奨励、家庭を守るべき主婦たちを労働市場から排除する動き
- 1914年 第一次世界大戦勃発  
WSPUのサフラジェットの釈放
- 1915年 「大蔵省協定」(Treasury Act)
- 1916年 Lloyd George の挙国一致内閣 (-1922)  
Dilution: 労働力の不足を非熟練・女性労働者で代替
- 1917年 NFWWは、「全国一般労働者組合」(National Union of General Workers NUGW) と合併  
WSPUはWomen's Partyへ  
Women's Auxiliary Army Corps (WAAC) 結成  
Women's Royal Naval Service (WRNS) 結成
- 1918年 第4回選挙法改正: イギリス初の普通選挙法。成年男子と30歳以上の婦人に選挙権が与えられる。  
マッカーサーが戦時中に動員された300万人の民間労働者の解除計画に対し抗議: 「平和は私たちを飢えさせるのか」
- 1919年 Royal Flying CorpsとRoyal Naval Air Serviceが合併→ Royal Air Force  
Women's Royal Air Force (WRAF) 結成  
WAAC解散
- 1920年 WREN、WRAF共に解散
- 1928年 第5回選挙法改正 男子と同じく21歳以上の婦人に選挙権

## 1. 女性による工場労働の代替 (Dilution)

1914年にはCrayfordの大軍需工場で、男性の賃金の半分で女性は砲弾製造に携わっていた。1915年 ロイド・ジョージ内閣で、「大蔵省協定」が結ばれ、戦場に送られた熟練労働者のポストを非熟練労働者、あるいは女性労働者で代替するDilution——「非熟練」労働者による労働力の「希釈」——に向けての準備が進められる。この協定には、ストライキの禁止、非熟練、女性労働者にも同等の賃金を支払うことなどが盛り込まれていた。また女性の労働者を大量に受け入れるに際し、年齢制限、雇用規定、女性職工長の任命が決定され、女性専用手洗所、更衣室が設置された。女性の労働現場での地位向上に関しては、マッカーサーが「全国女性労働者連合」を1906年に設立した。1914年には17万人だった女性労働者は、1917年には44万人に膨らんでいた。「戦時緊急労働者全国委員会」(War Emergency Workers' National Committee) が結成され、マッカーサーもこのメンバーになり、そこで、軍需産業の暴利取締り、価格統制、貧困救済を主張した。

## 2. 制服の女性たち

Florence Nightingaleがクリミア戦争で看護に関する改革を行って以来、看護は比較的女性が参加しやすい戦時奉仕の分野であった。陸・海・空軍は、それぞれ独自の看護部門を持っていた<sup>(7)</sup>。前線で働く看護婦の中には命を落とすものも少なくなかったが、果敢に看護に従事した様子は戦場の「天使」と称えられ、心理的にも兵士たちに良い影響を及ぼしたと伝えられる(Anderson, 37 - 8)。

ナイチンゲールが周囲の反対を押し切り勇ましく最初の看護婦たちを率いたところと違い、男性を癒す「看護」の仕事は既存の女性観に矛盾しないものにとらえられていたようだ<sup>(8)</sup>。しかし第一次世界大戦時、看護以外の分野でも女性たちは援護活動に参加した。戦争が始まると多くの女性団体が戦時奉仕を申し出た<sup>(9)</sup>。こうした熱心な申し出は、戦時特別室 (War Office) 及び他の関係機関からは軽視されていた。他のヨーロッパ各地ではイギリスの女性団体の奉仕は歓迎されていたが、本国では伝統的な女性観が根強く、民間防衛 (Civil Defence) における女性の重要性は低かった (Harris, 2)。しかし、塹壕での戦いが予期していたよりも大量の死傷者を出し、また徴兵の際、貧困による体力低下で兵役につけない男性たちの数が予想以上であったことから、軍部は女性の力を無視できなくなった。

1917年に結成されたWomen's Auxiliary Army Corps (WAAC) で、女性たちは運転手、事務、電話交換士、調理人、給仕、教師として活躍し、戦時中

10万人が制服を着て働いた。この組織ではQueen Maryをパトロンとし、「戦争特別室」で人事の仕事に当たっていたMona Chalmers Watsonが監督にあたった。このときフランス支部を率いていたHelen Gwynne-Vaughanは、第二次世界大戦時に女性の組織を立ち上げる際、大きな活躍を果たす。

WAACは非戦闘的な組織で、軍隊について前線まで赴き、調理、給仕などの業務を行うので"camp follower"と呼ばれていた。その働きは、海外の前線では高い評価と感謝を受けていたが、故郷イギリスではミュージックホールしばいの芝居などで揶揄の対象となっていた。「男性領域」であった戦場に踏み込んでいった女性たちに世間は好奇の眼差しを向け、道徳的墮落や結婚外妊娠などの噂が流れたため、後の人員確保が困難になった。1918年にはより多くの男性が戦場に送られたため、WAACの増員が急務だった。3月、調査団が派遣され、その結果、結婚外妊娠の驚くべき数、性病の多発、WAACの無能さについての噂は根拠のないものと証明され、労働大臣G.H. Robertsやカンタベリー大司教Randall DavidsonがWAACの名誉のために演説した。4月には、Queen MaryがWAACの最高司令官になり、Queen Mary's Army Auxiliary Corpsと新たに命名され、1919年に解散されるまで多くの女性が戦時奉仕を行った (Harris 4-5)。

海軍の援護組織、Women's Royal Naval Service (WRNS) が1917年の終わりに結成され、主に陸上の仕事に従事した。一部には無線を扱ったり、ボートの乗組員となったものもいたが、多くは掃除や料理など「女らしい」仕事に従事した。それまで空と海を行き来する飛行艇と飛行機の間で分離していたRoyal Naval Air ServiceとRoyal Flying Corpsは1918年4月に合併してRoyal Air Forceになり、その際、Women's Royal Air Force (WRAF) が結成された。他と同様、運転、タイピスト、売店経営、電話・電報技師など補助的な業務に従事した (Harris, 7)。

### 3. 第一次世界大戦の影響

戦時中の活躍の場から女性を追い出そうとする動きが、戦後間もなく現れた。工場労働からの女性の排除の理由としては、戦前、戦時中から指摘されていた「母性」への悪影響が強調される。若い女性は家庭を営む術を身につけず、家族を離れ労働につくため、将来、家庭を営み母となる準備ができなると懸念された。既婚者で労働についている場合は更に非難の対象とされた。その背後には、より安い賃金で雇える女性の労働力が労働市場で大きな割合を占めるようになり、戦場から戻ってきた男性労働者の不満が膨らむことへの懸念もあった。

しかしながら、多くの女性が工場労働を継続することにこだわった。第一次世界大戦時、本来ならば中上流階級の家庭に奉公に出ているであろう労働者階級の若い女性たちは、より短時間に高収入を得られる工場労働に従事した。結果として多くの女性たちが平時においても、工場労働を希望し、すでに進んでいたカントリー・ハウスの衰退に拍車をかけた。1930年代の大恐慌では、男性が職を失っても、比較的安い賃金で済む女性の方が仕事に就きやすかった。労働市場において、すでに女性は無視できない存在になっていた。軍隊において陸・海・空軍のどれもが平時においては女性の援護を必要とするべきではないと主張し、1921年には全ての"auxiliary force"の解散が完了した。看護部門と独立した組織であったFANYだけは、訓練を継続した (Anderson, 2)。

第一次世界大戦は女性のライフスタイルを大きく変えた。戦時奉仕で「市民」としての自信を得た若い女性は"modern manners"で上の世代の躰躰を買い、新聞や女性誌はこぞって、「現代女性」批評を書きたてた。ジャズに合わせて踊ること、喫煙や飲酒、人前での化粧、彼女たちが使うスラッグは格好の標的になった。1928年の第五回選挙法改正後、初めて行われた普通選挙には、着飾った若い女性たちが集まり"Flapper Election"と呼ばれた (Harris, 8) <sup>(10)</sup>。家庭以外に領域を広げ、戦時奉仕で得た権利を彼女たちが行動やファッションで誇示することに関して社会は批判的であった。女性たちは、労働力としての国家のニーズと、それに応えることによって得た権利、そして伝統的なジェンダー観との間に生まれる矛盾に直面していた。

## II. 女性労働力の再「稼動」(mobilization) へ

総力戦となった1940年以降のイギリスでは、選挙権を得て「市民」として受け入れられた女性は必要に応じて「家庭」から出ることが要求され、彼女たちの戦時貢献は時に「英雄的」なものとして表されている。

やがて歴史家たちはこう言うだろう。女性や子供に対する無法な戦争を行い、文明を脅かす無慈悲な国家に対し、有能で断固とした女性たちがその国家の邪悪な意志に立ち向かったのだと。

ナチズムは、女性が近代において手に入れた権利を奪おうとし、彼女たちを魂のない奴隷状態に引き戻そうとしている。二つの拳がナチを動かす狂気を叩くであろう。一つは、名誉と自由を愛するように、母、恋人、娘たちを愛するイギリスの男たちの拳。もう一つはイギリスの女性たちの拳である。彼女たちは神聖なる家庭が脅かされたとき、男性の同

志としての権利が自分たちにあることを証明したのだ。

("Fall in for War Service for Women", Anderson, 14 筆者日本語訳)

家庭／国家 (home) を侵害された女性たちは男性とともに立ち上がることを求められていた。しかし戦時奉仕の現場は伝統的な役割分担を反映し、「女らしい」役割を求めることがほとんどであった。また「男性領域」とされた戦場で女性がどのような立場に置かれたかを考えることは、表象分析を行う上でも重要なポイントである。プリーストリーが「男性は兵役につけば家庭、子供への責任から逃れられるが、女性の場合は更なる責任が重なるのみであった」と言い表したように<sup>(11)</sup>、女性は「家庭」という空間から出て、「家庭」での役割から逃れられるわけではなかった。そして「女性」であることと「国民」であること (femininity and nationhood) を両立することは、時に矛盾を孕んでいた。国家的要請に応じて奉仕に出ることが英雄的なこととして推進される一方で、既婚であれ、未婚であれ、「家庭」内におけるよき妻、母、従順な娘という役割から逸脱したとき、その姿は「女らしさ」が欠けたものとして非難されることもあったのである。

第一次世界大戦時に編成された女性の軍事援護組織は戦後ほとんどが解散され、そして女性工場労働者の多くが職を奪われた。しかしその活躍は、女性の人的リソースの存在を国家に印象付け、第二次世界大戦ではその再稼動が求められた。

1838年5月、第一次世界大戦時、女性の援護組織を編成するのに力をつくした7人の女性たちが、女性の軍隊 (Territorial Army) を編成すべきではないかと、陸軍運営に関わっていた陸軍少将John Brownと戦時特別室に集まり、話し合いを持った。その際、Auxiliary Territorial Service (ATS) の構想がなされ、訓練が開始した (Harris, 9-10)。1940年にドイツによる大空襲 (Blitz)<sup>(12)</sup> の開始までは特に目立った戦闘もなかったため、"Phoney War" と呼ばれた。この比較的平和な時期においては、制服の女性たちは単に好奇の目で見られることも多かったようだ。「更衣室に帽子、コート、毛皮、ハンドバックを脱ぎ散らかして、ハイヒールと絹のストッキングで訓練する "Britain's blouse and skirt army"」と揶揄する記事が雑誌に掲載された<sup>(13)</sup>。

1941年、戦況はさらに深刻になり、Winston Churchill首相は、1941年12月、「国家総動員法」(National Service No. 2 Act) を通過させ、「女性の徴兵」を法案として成立させる。19～30歳の独身女性か未亡人、子供がいない女性を対象とし、1918～23年に生まれた女性たちが最初に集められた。軍事援護活動、民間防衛、軍需工場での労働、そしてボランティア活動など

の選択肢があった (Harris, 35)。19万人の女性が軍事に携わり、そこには 2 等中尉 (Lieutenant) のElizabeth Windsorも含まれている。

### 女性援護組織の動き

1838年 Women's Voluntary Service活動開始

WAACは、the Auxiliary Territorial Service (ATS) として、再結成  
Dilutionの実行

1938年 Auxiliary Ambulance Service活動開始

Auxiliary Fire Service (AFS) 活動開始

1939年 Women in the Air Transport Auxiliary (ATA) 活動開始

The Women's Land Army活動再開

1939年 9 月 第二次世界大戦 (~1945年 8 月)

WRNSの再編成

WRAF→ Women's Auxiliary Air Force (WAAF) として再編成

1940年 Blitz開始 (-1941春)

1941年12月 The National Service Act: 「女性の徴兵」を法案として成立

1942年 Women's Timber Corps結成

### 農業への奉仕

30年代に入り、次の戦争の気配が近づくと、女性の援護組織は再組織化を始めた。その中の一つに第一次世界大戦時に活躍し、1939年に再開した Women's Land Army (WLA) がある。戸外で働く健康的な女性たちというイメージでアピールし、国の食料を賄うお手伝いをするというコンセプトは従来の女性の役割分担に比較的馴染みやすいものだったかもしれない (図版 1 参照)。1939年には4500人のLand Girlsが1943年には71000人に増加した。1944年には、WLAやYMCA、そして政府が経営するホステルが700軒ほどありLand Girlsたちはそこに滞在し、季節労働として乳牛の世話、干草作り、ジャガイモの収穫などを行った (Briggs, 52-59)。その他に、園芸、灌漑、ねずみの駆除などにも携わった。WLAは、農業技術の他にも実用的な訓練を行い、農家の女性はWLAを志望することが多かったようだ。給与は、滞在費などを除くと手元に残るお金はわずかで、戦後、WLAの働きは戦時貢献として認められなかったが、国内の食料自給率を高めるために大きく貢献した (Anderson, 99-100)。戦争状態が終結した後も、食料問題はまだ深刻で、他の組織に比べるとこの組織の必要性は高く、最終的に解散したのは1950年であった (Anderson, 50)。



図版 1 Women's Land Armyの募集ポスター



(ロンドン、帝国戦争博物館所蔵)

Women's Timber Corpsは、第一次世界大戦時結成されたWomen's Forestry Corpsの後進として、WLAとは別の制服を支給され、1942年に結成された。林業は女性の仕事ではないと考えられていたが、目覚ましい活躍によりこのような疑いは払拭された。戦前は林業では軽微な作業に携わる女性が200～300人いたに過ぎないが、1942年は1000人、1943年にはイングランドとウェールズで5000人以上のLumber Jillsが登場した。彼女たちの活躍は、戦前は90%の木材が輸入されていたが戦時中は25%に減少したことからも伺われる。炭焼きの仕事も含まれていて、炭を洗い落とす石鹼の配給クーポンが足りないという不満を述べる記録が残っている (Anderson, 104 - 5)。

### 工場労働者への視線

第一次世界大戦時、女性はDilutionで工場労働に登用されたが、戦後その多くが職場を追われた。1939年くらいまで、女性は主に「非熟練」の作業しか与えられなかったが、戦争が長期化、深刻化するにつれて5人の男性に対し3人の女性が働き、女性労働者の数は最終的にパートタイムも含めて200万人を超えた。しかしながら社会の反応は複雑であった。労働省は、いわゆる「女性の仕事」以外の分野に女性に登用することに最初は消極的であ

図版 2 工場労働者の募集ポスター



(ロンドン、帝国戦争博物館所蔵)

った。実際に1939年の8月には、282,148人から378,983人に失業者が増えていた。やがて政府の職業訓練センター（Government Training Centre）が発足し、国内で広く女性の訓練を行い、あらゆる分野で女性が雇用されるようになった（Anderson, 85）。

1940年に「緊急防衛法案」（Emergency Powers Bill）が国会を通過し、58A規定で労働省が男女個人にそれぞれ労働を指示することになった。同時に国家合同諮問会議（National Joint Advisory Council）は、非熟練男性労働者や女性労働者を雇い、十分な能力を発揮できる場合には「男性並みの」給与を支払うように工場側に働きかけた（Anderson, 11）。女性と男性の賃金格差は明らかで、ある飛行機工場では、全く同じ作業に女性は週に43シリング（£2.15）、男性は73シリング（£3.65）を支払っていた。

1941年には増加する需要に応えるため、14歳以上の子供のいない女性は全て労働力と見なされた（図版 2 参照）。労働大臣は今までに無かった問題を想定して、女性のメンバーを含む特別の諮問委員会（Women's Consultative Committee）を立ち上げた。結婚し、家庭を持っている多くの女性は"immobile"とみなされたが、未婚の女性は故郷を離れて、転々と工場を移動して働いた。早くから家族の監視を免れ、自分の収入を得る若い女性た

ちの金銭感覚と道徳観に社会は注目した (Anderson, 12-13) <sup>(14)</sup>。

### 民間防衛の女性たち

1937年に最初の空襲警戒に関する組織が提案される。内務省は女性も民間防衛に積極的に参加すべきだと主張したが、ここでも戦争が現実にならないうちは女性の参加はあまり盛り上がりを見せなかった。やがて民間防衛は日常生活の一部となり、女性の責任は増大した。

1938年3月、Women's Voluntary Serviceが発足し、工場や農場での労働に出られない既婚女性が多く参加した。空襲時の保護施設や食堂・売店の運営を無償で行った。郊外では、働く母親の子供や疎開 (evacuation) してきた子供たちの世話をした (Cooper, 13)。

空襲時、巡視員 (warden) の役割は重要であった。地域の対空襲組織を熟知し、爆撃の際は警察、消防、救急との連携を図り、人々を誘導する。Blitzのときには6名のうち1人は女性であった。

救急車の運転は特に女性の仕事とみなされた。Auxiliary Ambulance Serviceは1938年に開始し、訓練も女性のみで行われていた。贅沢品であった自動車を所有するそれまで働く必要の無かった中上流階級の女性たちが多く参加した。最初の救急車はありあわせの自動車を改造したものであった。1939年から男性も受け入れられたが、戦時中、女性は男性の倍の人数を占めた。激しい空襲の中、沈着冷静に救助活動を行い、政府から表彰されたものもある (Anderson 52-4)。

消防は当初、女性には危険すぎる「男性の仕事」とみなされていた。1938年、Auxiliary Fire Service (AFS) が結成され、女性は運転手、事務職、電話交換士、管制室スタッフとして採用された。ロンドンだけで5000人の女性が採用された。地域の消防団とAFSが統合し、National Fire Serviceが発足する。やはり、困難な状況で業務を遂行した女性たちが消防の分野で表彰されている (Anderson, 52-6)。

### ハンドルを握る女性たち

前述したように自動車の運転技術の有無は性差だけでなく、むしろ階級間の差異も反映していた。またテクノロジーは男女間の肉体的な能力の差異を超えることを可能にした面もあるようだ。ここでは戦時中、ハンドルを握り、自動車、船、鉄道、飛行機を操った女性たちを扱う。

1940年6月、ロンドンのバスで初めての女性車掌が採用され、5年のうちに、1万人の女性がバスやトラムを動かしていた。多くの男性が戦地へ召

集されると、タクシーで働く女性も増加した。運転手だけではなく鉄道にかかわる仕事、例えば、ポーター、貨物の手配、警備や清掃に多くの女性が従事し、イギリスの鉄道の6分の1が女性の労働力で動かされていた。

運河については、すでに多くの女性が仕事に従事していた。1943年にはますます労働力が不足し、女性は積極的に登用された。1944年には、11人の乗組員がロンドンーバーミンガム間とリーズーリバプール間の船を運行していた。彼女たちは胸のバッジIW (Inland Waterways) から、"Idle Women" とからかわれたが、その仕事ぶりはその呼び名を覆すものであった (Anderson, 92)。

1909年に活動を開始したFirst Aid Nursing Yeomanry (FANY) は、唯一の継続的な団体で、第一次世界大戦では救急部門で活躍した。1927年には輸送に携わる団体として公に認められ、1930年代から救急医療よりも輸送に力を入れ、やがてWomen's Transport ServiceのFANYとして認識されるようになった。FANYは、軍人の家系で、比較的裕福な家庭出身のものが多く、自分たちの独立した組織に誇りを持ち、メンバーはお互いに親しみを持っていた。1938年に後述するATSに吸収される際は、厳格な上下関係が求められる陸軍の一部となることに抵抗もあったようだ (Harris, 18) <sup>(15)</sup>

FANYの一部のメンバーはSpecial Operations Executive (SOE) とも関わりがあった。映画や本で有名になった秘密情報部員Violette SzaboやOdette Churchillは、女性の勇気と忍耐の象徴となっている。またSOEの訓練施設のスタッフはFANYのメンバーであった。アフリカ、アジアの困難な状況で軍隊に給食活動を行った"free Fany"たちもいた。1945年10月、FANYのメンバーがスマトラで捕虜たちと共に5000フィートの山越えを伴う90キロを踏破した際、日本人捕虜は自分たちを率いているのが一人の女性であることに驚愕した (Anderson, 168)。

二つの大戦の間、航空機は大きな進歩を遂げた。1930年代は飛行機の個人所有やクラブが人気で、戦争が始まると自分たちの能力を生かすためにCivil Air Guard (CAG) が結成された。戦争が始まると、メンバーはRAFあるいはWAAFに勧誘されるが、WAAFでは女性の飛行機の操縦は認められていなかった。そこで何人かの女性はAir Transport Auxiliary (ATA) で働くことを選んだ。ATAは民間組織で、工場から基地までの飛行機の輸送を担当し、最初はBritish Overseas Airways Corporation (BOAC) と提携していた。パイロットの多くは年齢のためにRAFに入隊できなかった男性がほとんどであった。1940年にPauline Gowerは女性の部署の設置を依頼され、航空経験も豊富な8人の女性たちがBOACによって試験を受けた。職に就けない男性が未

だにいたにも関わらず、「男性の仕事」である航空部門に女性を登用することに対して批判はあったが、新たに男性をパイロットとして訓練する時間は無かった (Anderson, 142)。

最初の女性パイロットは古いタイプのTiger Mothsの操縦を任された (Cooper, 21)。男性ならば軽く見逃されるミスも、女性パイロットの場合は厳しく非難された。しかし、やがて彼女たちは自分たちが優れたパイロットであることを証明し、悪評を覆していった。パイロットは操縦できる飛行機によって5段階に分けられるが 4 つのエンジンを持つ爆撃機を操縦できる Class Vにまで上りつめた女性は11名でその中にはAmy Johnsonも含まれている。1944年には全体の20%である100名のパイロットが 8 万台を輸送した。Class Vを除いて全てが単独飛行である (Anderson, 143)。

### 陸・海・空軍の女性

陸・海・空の国防軍はそれぞれATS、WREN、WAAFという女性の援護組織を持っていた。武器を握ることはまれで、主により多くの男性を戦場にするため、調理、配膳、売店の運営、清掃、事務、通信といった活動を行っていた。第一次世界大戦時に活躍した女性が、この組織化に大きな力を発揮した。30年代初め、Lady Londonderryは緊急時に士官として働く女性を訓練する機関、Women's Legionの設置を提案した。1936年には、平時において、女性の軍事力を確保するのは望ましくないと防衛委員会は考えていた。1938年に女性の登用計画が進められ、依然としてその重要性は低かったが、Women's Auxiliary Defence Service (WADS) として訓練が始まる。WADSは後にAuxiliary Territorial Service (ATS) と改名する (Anderson, 6-7)。

食事を兵士へ供給することは、援護組織の重要な業務であった。Navy, Army and Air Force Institutes (NAAFI) は、国防軍全てにまたがる組織で、官営の食堂・売店の運営を主に担当し、戦前から半分以上が女性で占められていた。1943年には、女性の割合は85%に増加し、ピーク時には 6 万人の女性が働いていた。戦場への出動が必要なこの組織はジュネーヴ協定 (Geneva Convention) で、戦闘員と同様の保護を受けるように設定されていた。NAAFIの女性たちは時にATSの制服で海外へも出動し、時には悪条件の下、過酷な労働条件で食料を提供しなければならなかった (Anderson, 150-1)。働く女性たちの笑顔が戦場の男性たちを慰めとなった面もあったらしい。北アフリカで戦闘に当たっていた兵士の一人は以下のように回顧している。

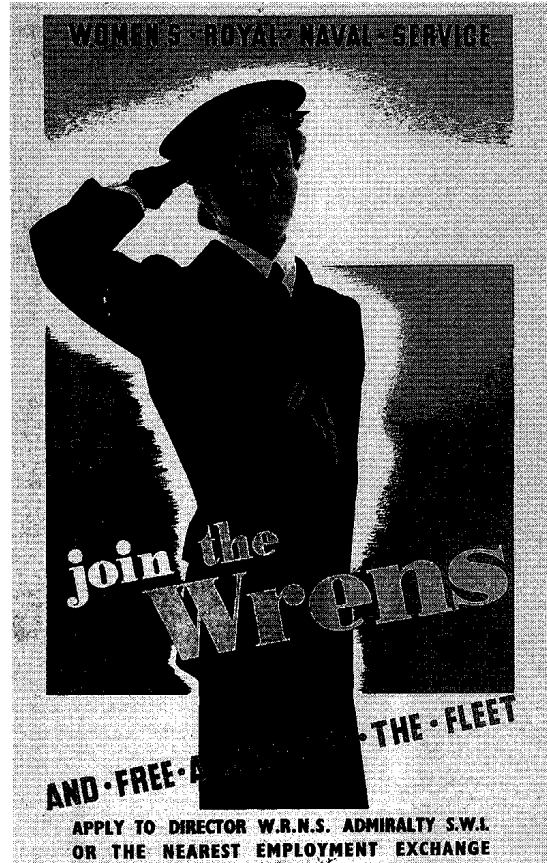
たとえ売り物のビールが無かったとしても、その笑顔にお金を払ったよ。

図版 3 WAAFの募集ポスター



(ロンドン、帝国戦争博物館所蔵)

図版 4 Wrensの募集ポスター



(ロンドン、帝国戦争博物館所蔵)

砂漠から帰ると、故郷の娘たちが腕まくりして洗い物をしている。そうした姿を見ることが自分たち兵士にとってどんなに意味を持っているとか。

(Anderson, 152 筆者日本語訳)

微笑を浮かべ、甲斐甲斐しく男性の世話をする女性。このイメージは「男性領域」である戦場における女性表象を考察する上で、重要な一つのパターンと考えられる。

空軍では、第一次世界大戦時RAFと共に結成され、解散されたWRAFに代わって、1939年にWAAFが結成された（図版 3 参照）。234人の士官と1500人の"airwomen"から成り、"airwomen"は、事務職、調理、配膳、パラシュートの製造、整備、あるいは運転手などを担当した。一部は指令室で、地図上の敵機をマークしたり、レーザー探査で活躍するメンバーもいた<sup>(16)</sup>。前述したようにWRAFでは、女性は飛行機の操縦を許可されることは無かった。

1940年には、士官は360人に、"airwomen"は8千人に増加し、戦争終結までには、18万 2 千人の女性がWAAFで働いていた。それはRAF全体の16%、国内に限れば22%に当たる。しかしながら最初の 2 年間は単なる補助的な

部門と考えられ、WAAFに独自の執行権は与えられていなかった。1941年にWAAFは正式に空軍の一部と認められ、空軍法が適用された。WAAFに開かれた部門としてパラシュートを整備するBalloon Operatorがある。1941年4月には、20人の志望者が10週間の訓練を受け、整備を開始した。1942年には、15700人の女性が、1万人の男性たちに代わり働いた (Anderson, 138 - 9)。

1938年、政府刊行物に始めて海軍へ女性を導入するという一文が現れ、1939年に Women's Royal Naval Serviceが再開した。(図版4参照) 極限られた業務に1500名の求人があり、その10倍の応募があったが、最初のWrensの多くは海軍関係者の家族から選ばれたようだ。1942年には4万人の女性が海軍の援護活動を行っており、第二次大戦中に7万2千人が働く。一部は空襲の際の特別警備隊 (Special Minewatch Units) として、テムズ川沿いの水中地雷を発見し、地雷を撤去するまで川を封鎖するという役目を果たした (Cooper, 15)。全体としては陸地での任務が少ない海軍で働く女性の数は、陸軍、空軍には遠く及ばない。当初Wrensは軍人ではなく、「市民」として扱われていたが、1941年に海軍としての義務と責任、そして権利を持つようになった (Anderson, 124)。

Auxiliary Territorial Service (ATS) は主に陸軍の援護活動を行った。1943年12月、ATSには20万人のメンバー、6千人の士官がいた。プロパガンダ映画 *The Gentle Sex* (1943) では、あらゆる階級の女性がATSのメンバーとして効率よく働いている様が描かれる。しかしながら、長い距離を走り、重い荷物を背負い行進する陸軍の仕事は決して "elegant" で "glamorous" なイメージからは程遠いものであったようだ (Harris, 5, 図版5参照)。ATSはより多くの男性が快適に戦闘活動に集中できるよう、調理、営巣、事務、トラックの運転、電気工事、大工、溶接、そして砲弾を詰める作業など様々な仕事に携わった (Cooper, 17)。それまで仕事を持っていなかった女性 (leisured girls)、販売、ドレスメイカー、美容師、工場労働者、家事労働者、女優、教師などがATSを志望した。配給は、男性の5分の4、給与は3分の2であった (Harris, 20)。1941年に、ATSは、陸軍法に基づき男性と同様の地位が与えられるが、殺傷能力のある武器を操ることには本人の了承が必要だった。当初は福利厚生も整わず、1942年夏の政府の公式の報告があるまでは、飲酒、不道德、そして妊娠などこの組織に関する根拠のない噂が出回ったため、娘を持つ親や若い女性たちの間にはこの組織に入ることを控えるものが増え、人員確保に影響を与えた (Anderson, 131) <sup>(17)</sup>。

「男性領域」である軍部において、女性はどのような立場におかれていた

図版 5 ATSの募集ポスター



(ロンドン、帝国戦争博物館所蔵)

のだろうか。昇進については、やはり称号 (title) のある女性が有利であった。女性の組織を立ち上げるときにトップに立ったのは Dame Helen Gwynne-Vaughan のような上流階級の女性たちであった。しかしながら Gwynne-Vaughan 自身は、「指導者にふさわしい威厳と知性を持つ人物ならば、女中が士官になっても構わない…今まで、私が今まで会った中で一番素晴らしい士官は巡査の娘であった」と述べた (Harris, 25-7)。

制服の女性たちの「美しさ」は社会の目にどのように映ったのであろうか。Gwynne-Vaughan の後にトップに就いた Jean Knox は、前任者と対照的な "glamorous" な士官であったらしい。彼女は ATS の制服をよりスマートなものにして、労働条件を改善し、ATS のイメージと広告戦略を刷新した (Harris, 34)。職務中の化粧はしばしば論争の的となったが、Helen Gwynne-Vaughan は、「ナチュラルメイク」を心がけるように助言していたらしい。一方では Northumberland の司令官である Miss Ainsworth のように「さえない娘たちを引き連れていっても、国のために一文の得にもならない。美しくメイクアップした方がいい」と主張するものもいたであろう (Harris, 27)。新聞や女性誌の広告には制服の女性たちが登場し、「地味な制服を着ていても清潔さ・おしゃれを忘れない」ことが推奨されている (図版 6、7 参照)。戦時中、



図版 6 News Chronicle掲載のPalmolive  
(石鹸)の広告

**BEAUTY**  
*answers the call . . .*

But . . . a smart W.A.A.F. still keeps that  
**Schoolgirl Complexion**

The best-looking women in uniform are those who take care of their skin. A daily bath with Palmolive is a natural beauty treatment, for its rich, velvety, olive-oil lather soothes and beautifies as it cleanses — keeps you "schoolgirl complexion" all over.

**PALMOLIVE**  
3½d. Including Tax.

(Harris, IV)

図版 7 口紅の広告。オレンジはカーキ色の制服に似合う色といわれていた。

**LIPSTICK REFILLS**

. . . in Tangee Natural or Theatrical Red are in good supply in medium and large sizes.

**1/10 & 5/-**  
*Including Purchase Tax*

From your Chemist or usual store

**TANGEE**

(Harris, 28)

儉約・節約が推奨される一方で、わずかながらでも自分の自由になるお金を手に入れた制服の女性たちは、消費の場において重要な役割を担っていたのかもしれない。

戦時中、ATSで勤めたAnne Varleyは女性の生活の変化について以下のように回顧している。

女性の生活は大きく変わりました。ほとんどの女性が自分の収入を持ち、自分の支出を管理し、家族や隣人の干渉から自由になりました。戦争が進むにつれて、女性は十分な収入を持つようになり、新しい友達と、パブや、職場である工場や、ダンスに行きました。そしてそこで新しい言葉を覚えました。その中には少なからず悪い言葉も含まれていました。ATSは、すぐに自分たちのことを「将校方の敷物」(officers' groundsheets)と呼ぶ兵士たちに応える術を身につけていきました。

(Harris, 36 筆者日本語訳)

さいごに

二つの大戦を通して、「国民」としての役割を求められたとき、確かに女

性たちはそれまでの限られた領域から出る機会を与えられた。若い工場労働者たちは、それまでは自分たちの生まれ育った土地から出ることは稀であったのに対し、短期間のうちに転々と場所を移動できる存在となった。飛行機や自動車といった新しいテクノロジーによって、一部の女性は活動範囲を広げ、身につけた運転技術を社会で活かす場を得た。陸・海・空軍の援護組織での労働は、それまでのジェンダーによる役割分担を反映していたが、工場労働と同様に多くの女性に独立した収入を与えた。また戦争によって、海外に渡った女性たち、海外との交流を持った女性たちもいた。1944年5月には2万人のイギリス女性がアメリカ人兵士と結婚していた (Cooper, 27)。Verleyは更に以下のように述べている。

私たちは生まれながらにして、お金や教育から遠ざけられ、偏見の目で見られてきた。女の子は、性に無知なまま育てられ、「男とは張り合うな」と教える世界に私たちは暮らしていた。大人になると、避妊は「不潔」なものとして教えられ、その手段を利用することは難しく、一方、中絶はほとんど犯罪と見なされるのだ。男性の同伴者がいなければまともなレストランで食事をすることもできず、パブに入ることは恥ずべきこととされていた。そして警察でさえ、夫と妻の間に入ることは許されない。たとえ妻が暴力を受けていたとしても。私たちは家庭に属す、小さな、か弱き性だった。 (Harris, 9)

戦争はこうした立場であった女性たちにある種の解放をもたらした。しかしながら、新しく与えられた領域内でも既存の男女の役割分担がなくなったわけではない。また「国民」として行動することが、既存の「女らしさ」と矛盾することもある。そしてそれまでは閉ざされていた「男性領域」に性に無知なまま飛び込むことは、時に望まない妊娠などの困難を女性にもたらしすることもあった。こうした「解放」に伴う更なる問題点は国際比較研究の大きなテーマとなるであろう。

また、ここでは扱わなかったが「平和主義」という視点も今後は考えていかなければならない。第二次大戦時には、宗教的信念から戦争に加担しない Women's Instituteなどのクエーカー教徒の団体があった。そうした団体は人道的な立場から、戦争での負傷者や孤児の手助けをしていた (Anderson, 41, 75)。「国民」として活動すること、「解放」されることが、一方では他国を侵略し、他民族を殺戮する戦争に加担する可能性があることは批判的に考えていく必要がある。

## 註

- (1) 18～19世紀イギリスにおける国民のジェンダー化についての考察はColleyとSamuelが示唆的である。
- (2) 「母性」や「家庭」の概念の形成と「国家」の関係については、Anna Davin, "Imperialism and motherhood" (Samuel, 203-35) を参照。「家庭」の概念の労働者階級への拡大についてはDyhouseの3章、"Good Wives and Little Mothers: Educational Provision for Working-Class Girls"が示唆的である。
- (3) BrownやCrockerは、当時のメディア、写真を用い戦時中のイギリスの「家庭」に関する研究を行っている。
- (4) 女性の工場労働に関するメディア表象、言説研究に関してはBriggs、Gledhill and Swanson、そしてMiddletonの研究が示唆的である。制服の女性に関しては、ロンドンの「帝国戦争博物館」(Imperial War Museum)を中心に陸・海・空軍の博物館で研究が進められ、Anderson、Cormack、Cooper、Harris、Martin、そしてWadgeが著作を残している。Brayleyの著作は上記の博物館の書店で多く扱われており、イギリスでは一部の専門家の間だけではなく、広く「戦争」に関する情報提供が行われていることを感じさせる。Wadgeの著作には制服を身につけた女性の組織に関する詳細な情報が収集されている。NormanやSheridanは幅広く女性たちの手記、手紙、日記などの収集を行っている。
- (5) 女性の参政権獲得運動と戦争との関連については、Brendon、川村、そしてLawを参照。
- (6) 第一次世界大戦時、WSPUのサフラジェットが釈放される。このことはロイド＝ジョージ首相によるパンクハーストの利用と解釈する動きもあるようだ。NUWSSもWSPUも戦争には協力的な態度を取った(村岡・川北, 235)。
- (7) 軍隊の看護部門の組織についてはWadge参照。
- (8) ナイチンゲールと彼女が率いた従軍看護婦たちについては、「戦場の天使」というイメージが定着しているが、Lytton Stracheyは、ビクトリア朝において、良家の子女であったナイチンゲールが戦場へ行くこと、そして看護の現場の改善に奔走したことは、当時の理想的な女性像からはむしろ逸脱していたと指摘している。
- (9) 第一次世界大戦が勃発したとき、戦時特別室に奉仕の申し出をした女性の団体は、Voluntary Aid Detachments (VADs) とFANYであった。この二つは第二次世界大戦時も同じ名前で活躍した。VADsは、赤十字とSt. John Ambulanceが運営し、FANYとも連携していた。1914年の時点で奉仕を申し出た組織は、Women's Hospital Corps、Women's Emergency Corps、Women's Volunteer Reserve、Women's Defence Relief Corps、Women's Auxiliary Force、Women's Volunteer Motor Drivers、そしてHome Service Corpsなどが記録に残っている(Harris, 2)。
- (10) "flapper"とは流行のファッションで着飾り、浮薄なライフスタイルを送る当時の若い女性たちを表現した言葉である。Robert Baden-Powellと共にボーイスカウト・ガールガイドの活動を推進していたOlave Baden-Powellは、早いうちから化粧をし、異性の視線を集めることに夢中になり、快樂をもてあそぶ"flapper"を批判し、若い女性たちを社会に有用な人物として訓練する必要性を主張した。("Our Brazen Flappers: A Question that needs urgent Attention", 13-14)
- (11) "BBC Postscripts" (Anderson, 17)
- (12) Blitzkrieg (lightening war)

- (13) *Picture Post* on the ATS's first 120 recruits, 10, October, 1938. (Harris, 27)
- (14) 工場労働につく若い女性たちに関する言説研究については、Gillian and Swansonが示唆的である。
- (15) FANYは自分たちの組織に誇りを持ち、ATSとの合併に関しては抵抗を感じていた。その背後には司令官Mary Baxter-EllisとATSの司令官Gwynne-Vaughanの間にあった不和も一つの原因であったようだ (Harris, 18)。
- (16) Constance Babington Smith、Sarah Churchill、Dorothy Garrodが写真分析や航空写真で活躍した (Anderson, 139-40)。
- (17) ATSでは妊娠二ヶ月以上のは職務を離れることが求められた。Varleyが回顧するように、陸軍と近い関係にあったATSの中には妊娠のために解雇されるもの、不法な中絶をするものもいたらしい (Harris, 34)。こうした「不祥事」は過剰にメディアに取り上げられたため、Gwynne-Vaughanは、人員確保を妨害するドイツのプロパガンダだと主張した (Harris, 11)。

#### 引用文献

- Anderson, Bette. *We Just Got On With It: British Women in World War II*. Oxford: Isis, 1994.
- Baden-Powell, Olave. *Training Girls as Guides: Hints for Commissioners and All Who Are Interested in the Welfare and Training of Girls*. London: Arthur Pearson, 1917.
- Brayley, Martin. *World War II Allied Women's Services*. (Men-at-Arms 357) Oxford: Osprey, 2001.
- , Richard Ingram. *World War II British Women's Uniforms In Colour Photographs*. Ravensbury: Crowood, 2001.
- . *World War II Allied Nursing Services*. (Men-at-Arms 370) Oxford: Osprey, 2002.
- Brendon, Piers. *Eminent Edwardians: Four Figures Who Defined Their Age: Northcliff, Balfour, Pankhurst, Baden-Powell*. London: Pimlico, 2003.
- Briggs, Asa. *Go To It!: Working for Victory on the Home Front 1939-1945*. London: Mitchell Beazley, 2000.
- Brown, Mike & Carol Harris. *The Wartime House: Home Life in Wartime Britain 1939-1945*. Phoenix Mill: Sutton, 2001.
- Cormack, Andrew and Peter Cormack. *British Air Forces 1914-1918 (2) : Men-At-Arms*. Oxford: Osprey, 2001.
- Crocker, Emma. *The Home Front In Photographs: Life in Britain During The Second World War*. Phoenix Mill: Sutton, 2004.
- Colley, Linda. *Forging the Nation 1707-1837*. Yale UP, 1992. (川北稔監訳『イギリス国民の誕生』東京：名古屋大学出版, 2000.)
- Cooper, Alison. *Women's War: Britain in World War II*. London: Hodder, 2003.
- Dyhouse, Carol. *Girls Growing Up in Late Victorian and Edwardian England*. London: Routledge, 1981.
- Gledhill, Christine, and Gillian Swanson. *Nationalising Femininity: Culture, Sexuality and British Cinema in the Second World War*. Manchester: Manchester UP, 1996.
- Harris, Carol. *Women at War: In Uniform 1939-1945*. Phoenix Mill: Sutton, 2003.
- 川村貞枝. 『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』東京：明石書店, 2001.

- Law, Cheryl. *Suffrage and Power: The Women's Movement, 1918-1928*. London: I.B. Tauris, 2000.
- Longmate, Norman. *The Home Front: An Anthology of Personal Experience 1938-1945. How We Lived Then: A History of Everyday Life During the Second World War*. (鶴丸幸代訳・解説「イギリスの銃後 1941-45年：N.ロングメイト『銃後・戦時体験集』から」『銃後史ノート』復刊 4 - 6 号, 女たちの現在を問う会, JCA出版, 1982.)
- Middleton, Lucy. Ed. *Women in the Labour Movement: The British Experience*. London: Croom Helm, 1997.
- 村岡健次, 川北稔. 『イギリス近代史 改訂版』東京：ミネルヴァ書房, 2003.
- Priestley, J. B. *British Women Go To War*. London: Collins, 1943.
- Samuel, Raphael. *Patriotism: The Making and Unmaking of British National Identity. Volume I: History and Politics*. London: Routledge, 1989.
- Sheridan, Dorothy. Ed. *Wartime Women: A Mass-Observation Anthology 1937-45*. New York: Phoenix, 2000.
- Strachy, Lytton. *Eminent Victorians*. (1918). Oxford: Oxford UP, 2003.
- Wadge, D. Collett. (ed.) *Women in Uniform*. London: Imperial War Museum, 2003.